大阪湾再生ニュース
# ぼちぼちいこか
2007.1
vol.2
人と海の関わりの再生をめざして…
楽しみながら取り組む大阪湾再生の現場を伝える

大阪湾再生 Osaka Bay Regeneration
http://www.kkr.mlit.go.jp/plan/suishin/boti2/
発行：大阪湾再生推進会議

vol.2

## 釣りと海とのいい関係を模索中
來田仁成さん

## ～大阪湾デビュー～「意外にきれい」
川島 翼くん

行政事業紹介「海のオアシス・人工干潟の再生について」

Copyright © 2006-2007 大阪湾再生ニュース【ぼちぼちいこか】 All rights reserved.

●行政事業紹介
## 海のオアシス・人工干潟の再生について

釣り文化協会の皆さんが活躍される「南港魚釣り園」から大和川を隔てた対岸に、人工的に干潟を造成するプロジェクトが進められています。

干潟は、潮の干満により干出と水没をくり返す水域のことをいい、稚魚やカニ類など多くの生き物が集まり、また、それらをエサとする水鳥も集まるなど、多様な生態系が育まれる海のオアシスです。

しかし、干潟は埋立・干拓がしやすいため、高度経済成長期に工業用地の造成などに利用され、大阪湾においても、その多くが消失しました。現在、大阪湾に残された干潟は約15haしかなく、同じ大都市の海である東京湾と比較しても、100分の１にも満たない状況です。

大阪湾再生推進会議では、大阪湾に人工的に干潟などの浅場の造成を進め、魚や貝の生息場を確保し、生き物に溢れる豊かな大阪湾の再生をめざしています。

この浅場で育った稚魚達がやがて育ち大阪湾を周遊し、釣りと海を愛する市民の方々を楽しませる日が来れば素晴らしいことですね。

現在、造成されている人工干潟は、大和川の河口に溜まった不要な砂を掘削し、海中に埋め戻すという云わばリユースで造られており、平成19年度に完成の予定です。

事業担当者：大阪府港湾局

# SPECIAL INTERVIEW

## 釣りと海とのいい関係を模索中
NPO法人 釣り文化協会代表
來田仁成さん

日曜日に「大阪南港魚釣り園」に行くと、聞けば釣りのノウハウを伝授してくれる人たちがいる。「公認釣りインストラクター」の資格を持つNPO法人 釣り文化協会 のみなさんだ。広く市民に呼びかけ「大阪湾水質モニタリング調査」を行うなどユニークな活動を展開している。代表の來田仁成（らいたひとしげ）さんに話を聞いた。（続きは裏面）

## ～大阪湾デビュー～「意外にきれい」
川島 翼くん

2006年晩秋の日曜日、南港魚釣り園で、NPO法人 釣り文化協会 主催の「大阪市民釣り大会」が開かれた。魚釣りを競うと同時に「大阪湾水質モニタリング調査」を行う大会だ。参加者約40組70人のうちの一人で、「今日が、大阪湾デビュー」という川島翼くん（23歳＝会社員）に密着した。（続きは裏面）

## ●來田仁成さん（つづき）

### 「公認釣りインストラクター」活躍

**「公認釣りインストラクター」とは？**

1992年から、水産庁の助成金を得て始まった制度によるもので、事業主体は社団法人全日本釣り団体協議会。釣り人に、健全なレクリエーション、エコロジカルスポーツとしての釣りと、釣り場をとりまく自然環境保全の知識を普及させ、併せてルールやマナーの指導などボランティア活動を行う公的資格です。

**NPO釣り文化協会のみなさんは、全員がその資格をお持ちなんですか。**

ほぼ全員です。皆、釣りが好きで、それぞれに“考えるところ”あって、公認釣りインストラクターの資格を取った。その資格を生かして活躍できる場をと、2005年7月にNPO釣り文化協会を設立した…という経緯です。

### 魚釣りは魚の命をもらうこと

**“考えるところ”の根っこ？　詳しく教えてください。**

釣りは楽しい遊びです。でも、魚を釣るということは、魚の命を人間が取るということ。魚釣りは魚の命をもらって初めて成立する遊びだと、釣りをしていると多かれ少なかれ認識するようになるものなんです。

私も、そうでした。魚一匹を釣ることは食物連鎖の始まりだと。人が釣りという楽しみを得るために、自然はもちろん社会的な迷惑をかけていないだろうか、魚釣りに対して人はもう少し謙虚にならなければいけないのではないか、などと考えるわけです。

前後して、たいていの釣り人には、「なんでこのごろ釣れなくなったのだろう」と思う時がある。

海の中にいる魚と直接に接触するのが釣り人です。釣れなくなった原因に、自分たちの存在も関係してやしないかと考える。海から魚がいなくなったら、魚釣りという遊びは成立しないわけですし、「楽しみとしての釣り」だけを追求しているわけにはいかないと気づく。社会的な秩序に則って魚釣りをし、魚がいる海の環境も守っていかなければと考えるようになるのです。

**なるほど。「魚釣りの社会性」に考えが及び、周囲の環境に目が向き、社会貢献を――となっていったのですね。**

### 「茅渟（ちぬ）の海」再び…

**來田さんが「釣れなくなった」とお感じになったのはいつごろでしたか？**

昭和40年代でしょうか。ちょうど高度経済成長期。大阪湾の埋立が進み、コンクリート護岸が増え、海辺の風景が激変すると共に、田畑には農薬が使われ、ゴミの質も量も変わってきていたころ。魚の産卵場が激減したばかりか餌、水温など魚をとりまくあらゆる環境が変わったから大阪湾の魚が減ったと、釣りを切り口に気づいたんですね。

**「美しい大阪湾」を取り戻さなければ、釣りができなくなると？**

そう。何か行動できないかと思うようになった。大阪府にも話を聞いてもらい、白浜にある近大水産試験場にチヌを養殖して育ててくれるように掛け合って…。まず24年前から、釣りクラブの集合体である（社）大阪府釣り団体協議会で、チヌの稚魚の放流を始めたんです。以来、水温のピークである８月末に、毎年２万匹放流しています。

**かつて「茅渟（ちぬ）の海」といわれたかつての大阪湾よ、再び…と、同じ思いの釣り人、多いのでしょう。**

海を見るのが習慣の釣り人は、潮の流れ、水温、塩分、酸素、魚の量、護岸の形状、赤潮・青潮、有害廃液の投棄などいろんなことを間近に見ていますから。一本釣りがほとんどなくなって漁業が企業化するにつれてみんなで海を守るというか「協同」の精神が薄らいできたとも感じますよ。釣り人たちには海との密接な関係から、なんとかしなければの思いも大きいのです。釣り文化協会では、先日、西宮浜、貝塚人口島、深日港でゴミ集めとゴミの種類の調査も行いました。

### 市民モニターと共に大阪湾水質調査

**大阪湾の水質調査もされているようですが…。**

はい。大阪湾の魚が年々少なくなってきた大きな原因の一つは、いうまでもなく「水質」です。ご承知のとおり、沖合の水温や水質、潮流などについては専門家の手で従来から調査されてきていますが、私たち釣り人が日ごろ目の当たりにする沿岸部の護岸や河口などのデータがなかったんです。だから、自分たちでやってみよう、と。

簡単で分かりやすい水質調査7つ道具

**調査は、どんなふうに行うのですか？**

「水色見本」で海の色を確認した後、バケツで表層、リサイクルのペットボトルで作った採取器で底層の水を組みあげ、水温、比重、pH、DO（容存酸素）、塩分濃度を計り、古いＣＤプレートの透明度計で光がどこまで届いているかを見て記録。子どもさんにも出来る簡単な方法で、モニターの方にも釣りに行った時などに随時お願いしているんです。主体的に調査することによって、海の環境への関心がよりいっそう高まればと思っています。

**普段の釣りに加えて調査によって、改めて気づかれたことはありましたか。**

ありますよ。８月下旬に、尼崎港付近～甲子園浜にかけての一帯で、青潮が発生しました。

水面が青くなり、温泉と同じ硫黄の匂いがして貝類、カニ類、小魚類が大量死するほか、数日経つと海辺は死んだ生物のため悪臭が漂いますが、８月初旬から予兆が出ていたことが、調査データから判明しました。

ほかにも、港の突堤の表と裏で生き物の種類や量が異なること、生き物に外来種が増えてきていることなども、調査から分かりました。

**それはすごい。データの数もパワーです。大阪湾再生への一歩ですね。**

そう。100年後も1000年後も釣りが楽しめる、多くの魚たちが棲む大阪湾にしていくための一歩として、今後多くのデータを収集していきたいんです。市民参加による環境モニタリングの全国的なシステムを構築すべく頑張りたいと思っています。ことによって、海の環境への関心がよりいっそう高まればと思っています。

※NPO法人 釣り文化協会　〒577-0804 東大阪市中小阪1-5-20　TEL 06-6729-9485　FAX 06-6729-9457　HP http://www.turibunka.or.jp/

## ●川島 翼くん（つづき）

### ～大阪湾デビュー～「意外にきれい」

**南港魚釣り園にて**

「日曜日の早起きは気持ちいいですね～」爽やかな笑顔で、日曜日の午前９時に南港海釣り園の釣り大会受付に現れた川島翼くんは、印刷関係の会社に勤める社会人１年生。大阪湾での釣りは初めてとのことで、「大阪湾デビュー、楽しみです」

受付を済ませて、「水質調査キット」を受け取り、釣り具を借り、売店でエサのオキアミを買って、さっそく釣り場の堤防へと歩を進めつつ、「スミマセン、大阪湾の水はもっと汚いのかと思っていました（笑）」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

暖かな日差しが注ぐ中、さっそく釣りの準備を開始する…と、そこへ現れたのが、「指導員」と書いた腕章を付けた「公認釣りインストラクター」氏。この魚釣り園を運営しているNPO法人釣り文化協会のメンバーで、釣り人を応援するためにボランティアで常駐している。

「釣りって個人プレーだから、釣り人同士はグループを組まないのかと思ってたけど、違うんだ…」と川島くん。魚場の情報を共有する目的などのグループはたくさんある。この釣り大会は、釣り人たちの横のつながりを生かし、釣り文化を継承すると共に、釣り人をとりまく自然環境に目を向けようという釣り文化協会の活動の一環だと聞く。

**釣りインストラクターのアドバイス**

「この辺りは、水深何メートルほどですか」「７メートルほどです。ご存知だと思いますが、オキアミを入れた網は上下するようにして撒き餌にしたらいいですよ」「群れ、今日はどうですか」「残念ながら小さいですね。周り（に群れが来て他の人が釣れているかどうか）を見ながら、竿を投げるといいですよ」

竿を垂らしながら川島くんがする質問に、釣りインストラクター氏は的確な答えをくれる。

さて、川島くんは、投げ釣りを繰り返す…が、なかなか釣れない。10メートルほど向こうには、30センチ大のボラを釣った人がいる。…２時間経過。オキアミがなくなったところで、「う～ん、今日はあきらめて、来週にでも出直します」と、川島くん。次は水質調査だ。

**海の健康診断？**

川島くんが水質調査キットを手にすると、すかさず釣りインストラクターがその方法を教えに来てくれた。「最初に、この色見本を海に向けて、もっとも近いと思う色番号を記入してください」川島くんは、迷いながらも群青色っぽい色をチョイスし、「結構、アナログなんですね」とポツリ。

「見た目は大事。海の色でプランクトンや青潮の発生状況も分かるんですよ」と言う釣りインストラクターに、「へ～。人間の健康診断と同じですね。元気があるかどうか、体に出ますもんね」と、川島くん。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

次は、キットに含まれるペットボトルで表層の水をくみ上げ、温度計で水温を計る。「23度」。比重計を用いて塩分濃度を計ると「1,021」。海底（7.5メートル）の水をくみ上げて測定すると、水温24度、塩分濃度1,024。「冬になるほど、海底のほうが暖かくなるんですね。塩分濃度は、昨日降った雨水も影響してるでしょう」と、釣りインストラクター氏は言う。

さらにpH（水素イオン濃度指数）は「8」、DO（溶存酸素量）は「6」。

「Phは、7.0より低ければ酸性、高ければアルカリ性ですが、大阪湾では普通8.0～8.5程度ですから、その範囲内。今日の大阪湾は病気の兆候なく元気だということですね」「DOは2.0以上で魚が生きていけるんですよ」川島くん、なるほど、なるほどとしきりにうなずく。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

最後に、CD-ROM風の光る円盤に重りをつけて海水に沈め、水深何メートルまで肉眼で見えるかをチェック。「3.5m」だった。「びっくりです。都会の海なのに（笑）、透明度がこんなに高いとは」

**「次も、調査のお手伝いしたい」**

それらの数値を報告書シートに書き込む川島くんに、調査の感想を聞くと、「僕のような者が調査したデータが役立つかもしれないとはうれしいですね。これからも釣りに来て、気軽に調査のお手伝いしたいな。今日は海辺で過ごせて、本当に癒されましたよ。魚が釣れなかったことが心残りなので、また改めて再訪します」

南を向けば、未来都市のような堺のコンビナートが見える南港。この環境に身を置くと、「癒される」と実感するのは川島くんだけでないはず――と、思えるのだった。

データ調査中の川島君